



幼児の 教育

家庭・保育所・幼稚園

好評発売中!

手づくり アンパンマンが いっぱい★ イベントおしらせ デコレーション

千金美穂・尾田芳子 共著

大人気シリーズ「手づくりアンパンマンが
いっぱい②ルームデコレーション」の続刊です。

色画用紙から生まれたアンパンマン
ワールドの仲間たちが、季節のイベントを
にぎやかにおしらせします。
アンパンマンたちと一緒に、
園生活を楽しく
盛り上げて
くださいね。



定価2,100円(税込)
26×21cm 96頁

- ★ 巻末の型紙をコピーして、簡単に制作できます。
- ★ 型紙の組み合わせ次第でいろいろなバリエーションを作ることできます。



【既刊】手づくりアンパンマンがいっぱい

- | | | | |
|---------------|-------|----------------|------|
| 1. グッズ・プレゼント | 島田明美 | 5. 通園グッズ | 島田明美 |
| 2. ルームデコレーション | 千金美穂 | 6. つくってね あそんでね | 島田明美 |
| 3. ぬいぐるみ・おもちゃ | コッベ平沢 | 7. つくってね あそんでね | |
| 4. ランチとおやつ | 大森いく子 | パート2 | 島田明美 |

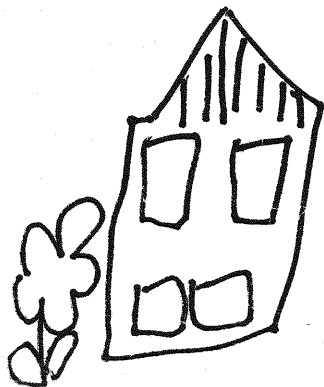
キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第105卷 第4号



幼 児 の 教 育 目 次
 — 第一〇五卷 第四号 —

© 2006
 日本幼稚園協会

巻頭言 保育雑感 幼児の社会性とは何か……………鯨岡 峻……………(4)

特集〈入園〉

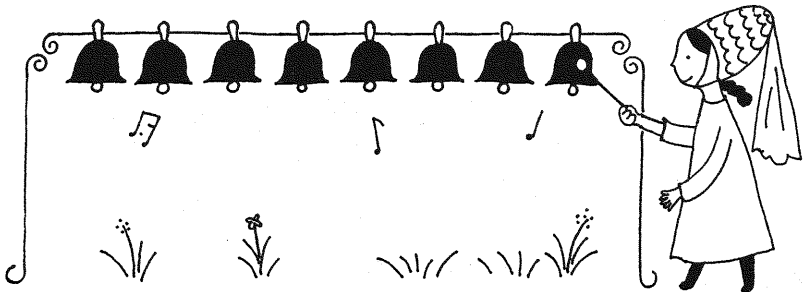
幼稚園入園の頃……………向山 陽子……………(8)

子どもたちの夢を紡いで……………佐藤 暁子……………(14)

「つながる」ことを大切にして……………高梨 智子……………(20)

新しい出会いのとき……………吉岡 晶子……………(26)

ある日……………(32)



長期化する人生の各ステージの位置づけ

—生涯発達時代の乳幼児期を考える—……………本田 和子…(34)

保育の改革を目指して(1) —折々に考えたこと—……………入江 礼子…(42)

大いなる足跡 —まさる君とライオン—……………高橋 麗子…(51)

私を通った幼稚園・保育園(11)

思い出の私と記憶の中のわたし……………富士原 紀絵…(58)

表紙絵／さのまきこ

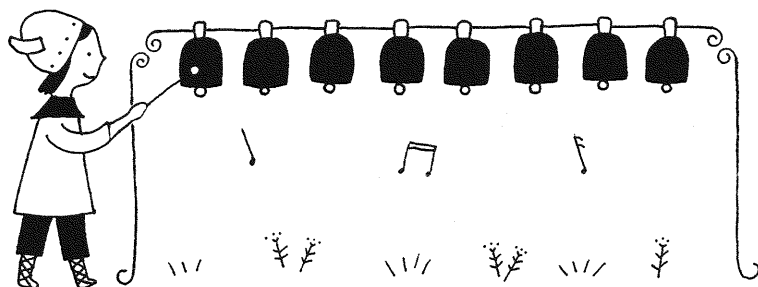
扉題字／津守 眞

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／さのまきこ

編集委員／浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子

編集部／河合 聡子



巻頭言

保育雑感 幼児の社会性とは何か

鯨岡 峻



一、早い社会性を願う風潮

いま、保護者も保育者も、子どもが早く社会性を身につけることを願う。ご挨拶ができるように、皆と一緒に行動できるように、問いかけにはきはきと応答できるように、自分の思いをことばでしっかり表現できるように、等々、というわけである。そのために、さまざま「させる」働きかけが生まれる。そしてそのような目に見える形での社会性が身につく程度に応じて、保育の良し悪しが議論されることになる。

こうした「できる、できない」にこだわる動向に対して、正面切って異を唱えることは難し



い。しかし、そこで想定されている幼児の社会性は、ほとんど大人にとつての社交性や社会適応性と変わりないものである。それが早期に身につけば、その後の対人関係や集団生活はすべてうまくいくかのように考えられているが、わが国の現状はむしろその逆のことを示していないだろうか。ここに、幼児の社会性というものを改めて考え直してみる必要が生まれる。

二、人と「共にある」ということ

幼児がその成長の途上で潜らなければならない大きな壁の一つは、他者という存在との関係のもち方である。一人の子どもにとつて、自分のいろいろな思いを実現するためには必ず他者が必要になる。しかしその他者は自分とは異なる存在であり、常に自分の思い通りに動いてくれるわけではない。この両面のことを少しずつ理解しながら身近な他者と関係を築いていくことは、幼児の世界にあつても避けて通ることのできない大きな課題であり、しばしば大きな壁になるものである。それは周囲や他者から主体として受け止められ、主体として生きてきた子どもが、他者もまた主体として生きているのだということを認め、他者を他者として受け止めるようになることもある。

この相互主体的な関係を簡単に言い換えれば、それは身近な他者と「共にある」「共におれらる」ということである。この対人関係の基本の成り立ちこそ、幼児の社会性の基盤をなすものである。ところがそれは、目に見える行動としての社会性とは異なつて目に見えにくいため



に、その重要性がなかなか理解されない。このことを一つのエピソードを通して考えてみよう。

三、「コキンていった」

私のような部外者が保育の場を訪れると、多くの子どもたちはときに興味津々の様子で、ときに胡散くさげに当の部外者を見て、中には「だれ?」「なにしにきたの?」と直截に訊く子もいる。近寄ってこないけれども、しつかりアンテナを立ててこちらの様子をうかがっている気配の子もいる。そういう対峙的な関係のありようにも幼児の社会性の一端が現れているといつてよいが、しかし私がいま取り上げたいのは、もつと密やかな「共にある」あり方である。

ある園を訪れて壁に貼ってある作品を見ていたとき、私の傍らに来て一緒に見ていたAちゃんは、「これは○○ちゃんが描いたんやで」と話しかけてきた。私は「そお」と話を合わせていたが、Aちゃんがしゃがんだので、私もしゃがんだ。そのときAちゃんは「コキンていった」とつぶやいた。私の膝は歳のせいで関節を曲げるときに微かに音がすることがあるようなのだが、どうやらAちゃんはそれを聞きつけたもようである。

四、社会性とは何か

取りとめもないエピソードであるが、しかし私はこのAちゃんをつぶやきに「はっ」とし



た。このつぶやきは、Aちゃんが私という部外の他者に関心を向けているというだけでなく、私に気持ちを持ち出し、私に寄り添っていること、私と「共にある」ことを告げているように私には聞こえた。つまり、Aちゃんが私とそこに「共にある」とする中で、このつぶやきが紡ぎ出されたように私には思われたのである。その様子は、常日頃、私たち大人が子どもと向き合うときに、子どもの方に気持ちを持ち出す仕方、寄り添う仕方にとてもよく似ている。それこそが対人関係の基本、真の社会性の基盤なのである。

Aちゃんがあのようになるとばを紡ぐことができた背景には、おそらく周囲の大人がそのような「共にある」あり方、つまり自らの気持ちを持ち出して子どもを受け止めるその仕方を示してきたからに違いない。逆に、目に見える「社会性」を早く身につけさせようと「させる」働きかけを重んじ、子どもの気持ちを受け止める姿勢の弱い保育の場では、Aちゃんのような柔らかい心をもった子どもを発見することは希である。

社会性とは何かという問いに真正面から答えるのは難しい。しかし真の社会性の基盤を培おうと思えば、子どもに強く働きかけて形としての社会性を身につけさせる前に、まずは大人が子どもに気持ちを持ち出し、子どもを一人の主体として受け止め、子どもと「共にある」とすることが大切である。その対人関係の基本を子どもが取り込むことによって、初めて他者との関係が築かれ、真の社会性に拓かれていくのであって、形にはめ込むことが社会性の育成ではないことを、ここで改めて強調しておきたい。

(京都大学)



特集 〈入園〉

幼稚園入園の頃

— 緩やかな母子分離と子どもの時間を保障したい —

向山 陽子

入園前の子どもとお母さんたち

三十数年前、大学卒業後に勤めた幼稚園では、入園直後に保護者面談がありました。担任として、入園までの家庭でのお子さんの様子などを保護者の方から伺うのが目的の面談でした。あるお母さんから「私はあの娘がかわいいと思えませ

ん。抱けないのです。私が望んだ娘ではないのです。妹は望んだ子ですのでかわいいと思えます。どうすればよいでしょう」と相談されました。当時の私は、何を話したのでしょうか。その子の顔が頭の中でぐるぐる回っていたことと、目を伏せたお母さんの辛そうな顔が想い出されます。入園までの四年余、このお母さんは、ご主人が帰るま

で、かわいいと思えない長女とかわいい次女との三人でどのように時間を過ごしてきたのだろう。またこの子は、母親との関係をどのように築き、依存すべき世界への信頼感をどのように育ててきたのだろうか、ずっと気がかりでした。

二十数年前、子育て中心の生活を選んで、十一年間勤めた大好きな幼稚園教諭の仕事を辞めた翌朝、時計を見ないで娘とずっと過ごせる幸せとともに感じたのは、社会からの孤立感と焦りでした。あふれんばかりの幸せと表裏一体にあるこの孤立感と焦りからの自立は、人の親として育つための試練のようにも思えました。

娘が幼稚園に入園するまで、私の子育ての支えになったのは、七〜八組の地域の子育て仲間でした。近くの公園で朝から夕方まで遊び、適度な距離を保ちながら、愚痴を言い合い、時にはママチャリを連ねて遠出もしました。その子育て仲間

も、子どもたちが四歳を過ぎる頃、幼稚園、保育園への入園、引越しとそれぞれの未来と子どもたちに沿って自然に関係が変わっていきました。

急いでいるお母さんたち

オランダから帰国し、幼稚園の園長職に就いて十年が経ちます。子どもたちの幼児期後半の豊かな育ちを保障することは勿論のこと、お母さんたちの子育てを応援したいと努めてきました。

子育て最中にあるお母さんたちの悩みは、三年前も今も変わっていないのかもしれませんが、お母さんたちを取り巻く社会は、夕暮れ時、家路を急ぎ、ゆ〜やけこやけと子どもと唄いながら夕焼け空を眺めた、あの豊かな時間を見失っているように思われます。夕空は今日も茜色に照り映えているのに、ママチャリは子どもと追われるように走っていきます。



社会は、少子化・情報化・都市化へと変化し、“子どもの素の姿”や“子どもの時間”をよしとする、ゆったりとした価値観や眼差しがどんどん失われているように思えます。

子どもが少なくなるということはこういうことなのだ、ひしひしと感じます。

先日、こんな話を聞きました。

「最近、生命が宿ったと判ると、かわいいう赤ちゃんが生まれてきたら、こんな洋服を着せ、どこそこ遊びに行つて、お稽古は何と何を習わせよう」と思い描き、出産するとすぐにそのお稽古先に電話して予約を取るのだとか……幼稚園・小学校選びもその延長線上にあるらしい。今のお母さんたちはとても急いでいます」

そんな先まで決めてしまつて大丈夫？ 自分で敷いた線路に縛られないでね。道は目の前にいく

つもあつて子どもは自分で選んでいくよ。ゆつたりと我が子との今を楽しめば、人生を二倍生きられるよ。もつたないなあと思いをめぐらした。

最近、我が子への寛容さと周囲に対しての心配りがもう少し豊かになると、お母さん同士の人間関係も滑らかになると思える場面がよくあります。たとえば、公共の場で大声を出して走ろうとする我が子をなだめながら、周囲への迷惑を詫びる態度をとる母親よりも、走り回るのを放任するか、我が子に自分の困惑と怒りをぶつけ、その場からいなくなるお母さん。さぞかし、イライラが募り、子どもも辛いことでしょう。

また、子どもは親からは見えない時間と空間で、仲間の中でこそ、親の知らない姿を見せながら育つていくことを、直視できないお母さんも増

えています。我が子のことは何でも知っていたいと、根掘り葉掘り聞きだし、子どもの言葉を鵜呑みにし、保育中の友達関係や、遊ぶ内容にまで指示を出して、子どもを遠隔操作しようとするお母さんがいます。そんなお母さんたちも、幼稚園での子どもの成長に、子ども同士の教育力、子ども自身の育つ力を信じられる親に育っていきます。

幼稚園の地域での役割

こうして考えていくと、幼稚園というところは、子どもたちが素の姿で振る舞うことができ、子どもの時間が流れる場であるといえます。

また、子どもらしい生命の輝きや空想力、未来への希望、人と社会への信頼感、人は人の間で社会的人間として育つ力をもつことや、子どもの優しさ・たくましさ・しなやかさを体感できる場として、大人たちのエネルギー再生の場としても、

もつと社会に尊重されるべき場なのでしょう。さらに、子どもたちの成長を通じて、親として育ち合う場としても、重要になってきます。

母親力・父親力を育てることが、子どもたちの安定と幸せな親子関係に繋がり、子どもたちが安心・安定できる居場所のある地域再生に繋がるのなら、さらに地道な努力を続けていこうと思いません。

Y幼稚園入園の頃

「ご家庭で、存分に愛情を受け、慈しみ育てられたお子様は、その安定感を基に、二三歳頃になる





と、一日に四〜五時間なら、好きなお母さんと離れて、同年代の仲間と遊ぶ中で育ちます。

初めての社会への入り口は緩やかに始まると思います。Y幼稚園は母子分離を急ぎません。

お子様の心にはっきりと『おかあさん』をもてたとき、誰もが安心して新しい社会に入っていきます。同年代の仲間の中で育つ「とき」がきたのです。

お母さま、その時はあなたも我が子のイメージを心にしつかりともって、お子様を仲間の中へ送り出してください。

そして、あなたの元へ帰ってきた「とき」には、丸ごと抱きしめて暖かい眼差しと懐で迎えてあげてください。そこに言葉はいりません。」

Y幼稚園新入園児三歳児保護者説明会（十二月）資料からの抜粋です。Y幼稚園の保育方針、保育内容、体制などの説明に加えて、かなり力を

入れて説明します。

Y幼稚園では、子どもがお母さんから離れることを嫌がったら、お母さんも一緒に幼稚園で過ごしていただきます（お仕事で園にいられないときは、全面的に幼稚園でお引き受けることもありまます）。子どもは安心できたら、自ら一步を踏み出しますから、離そうとしないでください。今は、ありのままの子どもを丸ごと受け入れて、安心して母子水入らずの最後の冬を、ぬくぬくとのんびりと抱きしめて過ごして欲しい、と続けます。『そんなことをしたら、幼稚園には行けない』『幼稚園の先生に叱ってもらおう』などと、言わないで欲しい、子どもの楽しい幼稚園の印象を壊さないで欲しいと願っています。

親離れできない子どもはやがては離れますが、難しいのは子離れできない親に思い切つて離れていただくことです、とも話しておきます。

おむつが取れないという相談も、ここまできて取れなければ取るうと焦らないで欲しい、焦らずこの冬に取れたなら一緒に喜びましょう、と話します。

何故、『入園式』から幼稚園が始まるの？

「初めてY幼稚園に来た見学のときも、遊んでいるお兄さんお姉さんたちは楽しそうだったし、園庭開放でも、一日入園でも、たくさん遊べたのに、楽しみにしていた幼稚園が始まる最初の日、お母さんもお父さんもいつもとは違ってすごく緊張しているしお化粧してる……どうして今日は遊べないんだ？」私が新入園児だったら、こう感じるだろうなとずっと思っていました。

日本の文化なのでしょう。節目としての「式」を大切にしたい保護者の方々はたくさんいらっしやいます。そこで、入園式の数日前に、気楽に

母子で遊びに来る日「ふれあい牧場の日（移動動物園）」を設けています。ポニー・ウサギ・モルモット・ヒツジ・ヤギ・ブタ・アヒル・ヒヨコ・カメラ……新入園児はお母さんと遊びにきて楽しんで帰っていきます。素の親子関係が見られる機会です。入園式の前に、仲良くなれる日でもありません。

こうして、子どもたちのY幼稚園での生活が始まります。毎朝、玄関前で「おはようございます」と挨拶をして子どもたちをお預かりするとき、親御さんが晴れやかな顔ならば、今日の一日は上々の始まりです。

さあ、子どもの時間が始まります。

（大和郷幼稚園）



子どもたちの夢を紡いで

— 幼児期の学びのもつ

しなやかさとたくましさ乾杯！—

佐藤 暁子

はじめに

幼児期は、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期であり、家庭での親しい人間関係を軸にして営まれていた生活から、より広い世界に目を向け始め、生活の場、他者との関

係、興味や関心等が急激に拡がり「依存」から「独立」に向かいながら、自分の世界を創り出していく素晴らしい時期であると考えています。私は幼稚園教諭を自分の天職として、子どもたちとともに夢を紡いでいく幸せな日々を過ごすことができ、また、私生活では三児の母親、二児の祖母

として子育てに携わっていくことで、家庭のなかで子どもたちの素顔にも触れることができました。一人ひとりの顔や体型、性格が違うように、心の有り様も様々であるということを実感するとともに、家族に愛され、安定した情緒の下でいろいろな試行錯誤を繰り返しながら、自分の足で一歩一歩しっかりと歩きながら世界を拓げていくのだなということを実感しています。

また一方で、子どもを取り巻く大人たちの何気ない一言や、子どもの仕種がかわいくて思わず笑ってしまったこと等が、時には子どもたちのブライドを傷つけてしまい、気力や意欲を無くしてしまつて「やれない↓やらない」へ、「言えない↓言わない」へと変化していく姿に出会うこともあります。一人ひとりの子どもたちが「幼児期にふさわしい生活」を過ごしながら、素晴らしい自分の夢を紡いでいってくれるようにと願つてやみま

せん。今年で三十九回目の入園式を迎えようとしている今、私の出会った子どもたちとの日々を振り返りながら幼稚園教育の大切さについて語っていききたいと思います。

入園式の日にくお母さんからの独立

お母さんの手をギュッと握りしめ、神妙な顔つきで幼稚園の門をくぐり入園式にやってきたK君。いつも未就園児の園庭開放にやってくる時、とても元気で笑顔で挨拶をして遊びだすのに……緊張してるのかな？ お兄ちゃんもお姉ちゃんもこの幼稚園にいたので、毎日お母さんと一緒に歩いてきていたのに……。次の日、相変わらずお母さんの手をギュッと握りしめ、硬い表情でやってきました。「K君おはよう！ 元気に幼稚園にこれて良かったね！」握手をして出迎えると、片方の手だけはお母さんの手をつないだまま



で握手をし、なかなか離れられません。お母さんも先生もK君のことを「〇〇ちゃんの弟だから幼稚園に慣れている」と思い込んでいるようですが、Kちゃんにとって初めてお母さんと離れて幼稚園で過ごすことは、とても不安で勇気のいることだったのでしよう。お母さんが帰ったあとのK君は、どことなく不安そうに友達遊ぶ様子を感じと見ていました。降園後、早速先生たちで話し合い、登園時の子どもたちの様子によつては、無理にお母さんから子どもを引き離すのではなく、好きな遊びを見つけたり、先生と仲良しになつてきてお母さんを目で探さなくなつたら帰っていたかどうかのようにしようことにしました。先生とお母さんに心のゆとりができ、お母さんも楽しそうにお部屋の隅で椅子に腰掛けて子どもたちの様子を見ていることで、子どもたちも安心

し、例年よりも早くみんなが元気に遊べるようになってきました。幼稚園に早く慣れるようにと不安定な子どもを無理に引き離すのではなく、子ども自身が楽しいことを見つけ、お母さんから独立していくことができるための「環境作り」こそが、保育者の務めではないでしょうか。

A子先生だーいすき！ かわいいんだよ！

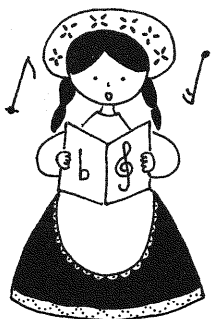
登園時、次々と元気にやってくる親子に挨拶をしていた私にT君のお母さんが「園長先生、聞いてください。昨日夕食の時に、うちのお姉ちゃんが『モーニング娘。』のことをかわいいねって話していたら、この子が急に泣きだして『A子先生のほうがかわいいもん』て猛抗議をするんですよ。そして『僕A子先生だーいすき！』ですって。ちょっと焼きもち焼いてしまいました」と嬉しそう

うに話してくれました。入園して間もなく、お母さんが帰ったあとの子どもたちは、きつと担任の先生の優しい笑顔や温かい手のぬくもり、そして絵本を読んだり歌を歌ったりしてくれる時の楽しそうな表情に、安心し、心が和らいでくるのでしよう。『幼稚園に喜んで通園し、生活のリズムに慣れて安心して遊びだす四月!』そのスタートの大切な時期に、保育者の醸し出す温かくて楽しい雰囲気、そして困った時にさり気なく助けられる優しさは、子どもたちにとって何にも変えがたい母親に代わる安心感もてる人的環境ではないのでしょうか。幼稚園での決まりやルールを身につけていくことは大切なことですが、その前に「幼稚園だーいすき! 先生だーいすき!」と子どもたちがお家で言える日が一日も早くくることを願っています。

家庭と連続した生活の中で拡がる

子どもたちのネットワーク

入園して二週間ほどたち、幼稚園生活に慣れてきたころから本園では家庭訪問を実施しています。第一に、毎朝、お母さんと手をつなぎと登園してくる子どもたちが、どんな道のりを歩いて通園してくるのか。第二に、家庭での園児の様子や入園してからの様子などを伝え合いながら、園と家庭が互いに信頼感をもって幼児教育を進めてい





くため。そして何よりも、先生がお家に来てくれてお母さんと仲良しで話している姿を見て子どもが親近感をもつことなどを目的に実施しています。親子で二、三年間お喋りを楽しみながら、毎日通園する道を知るとともに、園として、交通安全全面や生活安全（不審者対策等）の配慮点などを調査し対策を立てていくことも必要です。また、初めての集団生活に親子共にまだ戸惑いをもっている、個人的に話したい保護者ともじっくり話すことができるまたとない機会です。園生活のなかでは見過ごされがちな小さな出来事にも、シッカリと聞く耳をもち、受け止めていくことで、保護者との信頼関係ができ、開かれた学級経営ができていくと考えます。そして何よりの収穫は、子どもたちにとつて、先生が我が家に来てくれることが、とても楽しみであり喜びであるということです。「先生が僕んちに来てくれたんだよ」「私のと

こにも来てくれたよ」次の日から、先生と子どもたちの関係が一步前進していることが感じられます。また、家庭との連続性、循環性のある生活のなかで、子どもたちは「面白そう！ 楽しそう！うれしかった！ 悲しかった！」等様々な感情体験をしていきます。帰り道に「今日ね、Mちゃんとお母さんごっこしたの、ごちそう作ったの」「あのね、ウサギさんに人參あげたんだよ。ぱくって食べたの」夢中になって話してくれる我が子のキラキラと輝く瞳に、園生活を楽しんでいることがきくと感じられることでしょう。次の日に人參やリンゴの皮を大切そうに持ってきてくれる親子の姿に、幼いなりに楽しいネットワークがつながってきていることを感じています。子どもたちの園での生活の様子や楽しいエピソードを園便りや学級便りで伝えていくことで、園と家庭との親近感が生まれ、家庭からのお便りを学級便りな

どにのせ交流していくことで、ネットワークが拡がり、つながっていき、子どもたちの生活にますます豊かな拡がりが見られていくのではないかと考えます。

おわりに

中央教育審議会の答申に、「遊びの中で、遊びを通して学ぶ」幼児教育の重要性と、そのことが「後伸びする力となる」ことがいわれています。「たかが遊び、されど遊び」子どもたちが夢中になつて遊ぶ姿のなかに、気づきが見られ、試行錯誤が見られ、工夫が見られ、そしてやり遂げた喜びや満足感が見られます。そのことが次への意欲となり、新たな学びの階段を自分の力で登り始めるのです。教科書や楽譜を通して学ぶのではなく初めての集団生活のなかで沢山の人やもの、出来事と出会いながら、夢中になって取り組み様々な

体験を繰り返しながら、身につけていくのです。初めてお母さんと入園式に参加したあの日から、子どもたちは毎日の生活のなかで「ドキドキ体験、ワクワク体験、ハラハラ体験」を繰り返しながら、心豊かにたくましく成長していきます。そしてしなやかさとたくましさを身につけながら実際に多くのことを吸収していきます。私たち保育者も、子どもたちに負けないバイタリティーと保育者としてのスペシャリティーに磨きをかけ、子どもたちの「先生だーいすき!」「先生すごーい!」の言葉に励まされながら、子どもたちの素晴らしい明日に向けて研修を深めていくことが大切です。そして、幼児期の学びの素晴らしさに誇りをもち、子どもの姿を通して幼児教育の重要性を伝えていけるように努力してまいります。

(新宿区立愛日幼稚園)



「つながる」ことを大切に

高梨 智子

子どもたちと私たち教師の出会いが入園式が初めてではありません。それは、入園面接の時から、始まっています。面接では、十五分というわずかな時間の中で、一人ひとりと向き合い、最後に「待っているね」の言葉をおくりまします。この言葉の中には、子どもたちに「あなたのことを待つ

ているよ」「大丈夫、楽しいことがいっぱいあるよ」などのメッセージを込めています。さて、入園当初には、こんな姿があります。子どもたちを「○○ちゃんだね」と名前と呼ぶと、「何で知っているの?」と不思議そうに教師を見ます。隣にいる子どもも、じゃあ私は? という

ような表情で教師を見ます。同じように名前で呼ぶと、ニコニコ顔になります。このように教師は、子どもたちの名前を早く覚え、たくさん名前を呼ぶようにしています。それは、子どもが名前を呼ばれることで、教師に親しみをもつからです。『私を知っていてくれる』という思いが、自分の存在を、相手の中に感じるのだと思います。

また、涙が止まらない幼児に「ここを持っていてね」と教師の服のポケットをつかませると、泣きながらも、しっかりとポケットを握りしめ、その手が離れようものなら、追いかけて来て、またぎゅつとつかむのです。教師の両方のポケットに子どもをつかませながら保育室を歩くこともしばしばです。身体がつながっているということでは安心感をもつのです。

他にも、子どもたちの身体に触れ、スキンシップ

をすることを心がけています。登園時、挨拶しながら手を握ったり、遊んでいる時にも、そつと頭をなでたり、肩に触れたり、園庭に出る時に、手をつないで移動したりします。そして、降園時には、「また明日ね」という気持ちを込めて、ぎゅつと握手したり抱きしめたりして帰ります。人に触れる、触れられる安心感がここにもあります。

また、「○○しましょう」と口頭の指示だけで行動させようとするのはなく、カバンや帽子を教師と一緒に置いたり、「一緒に○○しよう」と遊びに誘ったりしています。子どもは、先生と一緒にすることで『皆の先生』ではなく『私だけの先生』という気持ちを感じるのです。そして『一緒』であることは子どもたちの『何だか嬉しい』そんな気持ちをくすぐるのです。

このように教師は、様々な形で、まず、子ども



たちと『つながる』（幼児と関係をつくる）ことを心がけます。そのことが、幼稚園生活をスタートさせる上でまず第一に大切なことであると考えられるからです。初めて保護者から離れた子どもたちが、教師に対して、保護者と同じ気持ち（安心感）を感じて欲しいと考えています。

ほとんどの子どもたちが、このように教師がかかわっていくことで「幼稚園で楽しいな」という思いで過ごせるようになるのですが、もう少し深く、思いを読み取ってかかわっていかなければいけない子どもたちもいます。そのような事例をあげてみます。

事例1 「ママに会いたい！」—教師が自分と気持ちと同じであることへの安心感—

入園式の翌日。保護者と離れられずに、泣き

出したA子。保護者から預かり、教師が抱えて保育室に行き、何とか荷物の始末をしても、まだ泣き止まない。「ママに会いたい」「ママのお迎えまだ？」と言って泣き続けた。「そう、ママのことが好きなんだね。私も一緒。ママっていいよね。私もママに会いたくなっちゃったな」と大の大人が言う姿にA子はきょとんとした。その後も「ママもきつとそう思っつて、急いでお掃除しているんじゃないかな」などと声をかけ、大好きなママの話が続けた。

この事例のような姿は、入園式の翌日から必ず見られます。このような時には、気持ちを切り替えさせようとするのではなく「そうよね」と子どもも気持ちに共感したいと思っつています。そうすることで、子どもも、自分の気持ちを受け止めて

もらえたと安心するようです。いつも思うのは、子どもと向き合うのではなくて、子どもの隣で、一緒に語らう……そんな存在でありたいということです。

事例2 「僕ここで、考えてるから……」

—自分をわかってくれる人がいる安心感—

A男は保護者と一緒に保育室にやってきた。

「楽しそうだよ！ 遊んでおいで」と保護者は、何とか中に入れようと、声をかける。しかし、A男は、じっと中を見つめ「ぼくね、考えてるから……」と言って中には入ろうとしな。教師は「そうか……。じゃ、ここに座って考える？」と椅子を差し出した。すると保護者の顔を見上げながら、何とか腰掛けた。その日は、ドアの敷居を越えずに、廊下で座って中

遊ぶ友達の様子を見つめていた。

この事例からは、「考えているから……」という言葉と、その必死な表情に、初めての場に緊張しているA男の気持ちが伝わってきました。母親が自分を中に入れようとしている気持ちをキャッチし、でもそれに応えられない自分がいる。子どもも子どもなりに心の中で葛藤しているのです。そんな胸の内を察し「大丈夫わかっているよ」と、頑張った小さな一步を受け止めていきたいと考えています。





事例3 「〇〇組で遊びたい」

―居場所を保障されることで感じる安心感―

B男、C男、D男の三人は入園前から仲良しだったが、学級編制では、B男だけが違うクラスになってしまった。B男は自分の保育室では、何をして遊んでいいかわからず、戸惑いを見せていたが、しばらくして「〇〇組で遊びたい！」とC男D男のクラスに行き、三人になると笑顔で遊び始めた。

この事例では、保護者から離れた幼児にとつて、仲良しの友達が心の支えのひとつであると感じました。そこで、自分のクラスに入るといふ形を急がずに、「〇〇組で遊んでいるんだね。じゃ、集まりになったら迎えに来るね」と、離れていても、教師は、あなたのことを思っているよ

という気持ちを伝えながら、その姿は認めていきました。

他にも、いろいろな理由で、部屋に入れなかったり、いられなかったりする場合があります。そんな時には他の教師と連携をとり、その子が心地よくいられる場で過ごす時間を大切にしています。

このように、子どもたちの気持ちを受け止め『つながり』ながら、同時に大切なのは『教師と保護者もつながる』ということだと思います。事例1では、保護者の方に対しては、泣いているわが子を思い帰宅する気持ちを受け止め、子どもの姿を、保護者の方が安心できるように具体的に伝えるようにしました。このような場合は、無理に親子を離さずに、子どもが自分から「お母さんいいよ」と離れられるまで、保護者の方の思いも伺いながら、保育室に一緒に入っていたくことも

あります。事例2では、廊下から、部屋の中に場を移せたことを、教師と保護者が、共に喜び合えるようにしました。事例3では、保護者の方にも、本人の思いを伝え、心地よくいられる場でも、ごす時間を積み重ね、幼稚園という場への安心感をもたせていきたいと思います。子どもたちが幼稚園で過ごす時間は、保護者の方には見ることができません。その間の子どもたちの変容を、見ることができるとは、共にいる私たち教師だけです。そのことを心にとめ、園内での子どもたちの様々な姿を記録に取り、保護者の方に伝えていくよう心がけています。また、担任だけでなく、園全体で、子どもたちと保護者の方を受け止めていかれるよう、全職員で共通理解しながら保護者の方との連携を図っています。

近年は、自治体の実施する未就園児保育などの

幼稚園開放によって、親子で幼稚園に登園し、共に時間を過ごす機会が増えました。長い期間をかけて、幼稚園という場になれば、家庭から幼稚園への段差を緩やかに越え、入園を迎えることができるようになってきたと感じています。しかし、そうした経験を踏まずに、入園してくる子どもと保護者の方もいます。様々な状況の親子がやってくることを念頭に置き、「初めてなのだから、できなくて当たり前」という気持ちを教師自身で忘れずにいたいと思います。子どもたちが見せる行動の理由を「なぜなんだろう?」「どんな気持ちなのだろう?」とわかろうとする気持ちを持ち続けたい……何よりも、子どもたち自身が『自分から、歩き出す』そんな力をもつことができるように、気持ちを支えていくことが教師の役割であると思っています。

(浦安市立神明幼稚園)



新しい出会いのとき

吉岡 晶子

四月、さくら便りとともに、気持ちがわくわくして新しくなる季節。一年に一回春は必ずやってきて、毎年、毎回気持ちをリフレッシュしてくれませう。新年度、新学期、入園式と、新たな人との出会いが気持ちを前向きにして生き生きとさせてくれる季節、私にとって大事な大好きなときです。

入園式。これから一緒に生活する子どもたちとのご対面。これまでに何度も経験しているのに、何回繰り返しても毎回どきどきします。初めて会う私をどう思うかしら、受け入れてくれるかしら、笑顔で迎えよう、など不安と緊張は私も子どもたちも同じです。

これまでには、いろいろな出会い方がありました。「おはよう〇〇ちゃん」と言ってもプイと横を向いてしまったA子ちゃん。私の腕の中でしくしく泣き続けたBくん。一生懸命練習してきたのでしょうか、「わたしは〇〇です」と立派な挨拶をしたC子ちゃん。人数を数えるとな人多いのでおかしいなと思っていたら、隣の組からのお客様がいたりしたこともありました。みんな初めてのところに来て精一杯の自分の思いを表しています。それはわたしも同じ気持ち。みんな新しく、新しい生活へのスタートの日、記念すべき一日が始まります。

本園の入園式の日、年少児は五十メートルもありそうな長い廊下を、歩いて遊戯室へ向かうという難関イベントから始まります。なにしろ年少児

の保育室は玄関のすぐ近くにあるのですが、遊戯室は、長い廊下のはじつこにあるのですから。西も東もわからず、今自分が何でどこにいるのかもよくわからないのに、初めてあつた人（先生）にどこかに連れていかれる……。さぞかし不安なことでしょう。ここに、頼もしい助っ人が現れます。年長になりたての年長児の選抜メンバー（と言っても希望者ですが）が、エスコートしに迎えに来てくれます。

年少児一人に年長児一人が手をつなぎ、偶然出会った二十ペアが並びます。もちろん中には泣いて母親から離れない子もいますし、並んではいても手はつながない子もいます。それはそれで認めてあげましょう。両手を年長さんにつないでもらって「もうなにもできない、どこへも行けない」という状況になる子もいます。担任としては有難



いことでもあります。

年長になって二日目の年長児も、使命感と緊張感がないまぜの表情。“みんながすぎるように先頭にいる担任を見つめている”と、担任は思っています、笑顔を絶やさずにいます。

遊戯室にたどりつき、座席に案内して役目が終わると、年長児はホッとして緊張がほぐれ、いつもの笑顔にもどり、リラックスした表情。半月前までは年中児だったのにやけに大人びて見える時です。

不安な時、何かを持ったり、誰かに寄りかかったり、手を握ったりと拠りどころが欲しいものです。そんな時に自分の手をしっかり握ってくれる人がいるということはなんて心強いことでしょう。年少児にとっては、知らない人であっても、自分より少しだけ大きい年長さんが自分の気持ち

に近いと思えるのでしょうか、無理のない自然な支えになるようです。この日の体験は、年長児にとっては、これからの生活は小さい不安そうなる年少児も一緒になって繰り返し広げられていくであろうことを実感させてくれ、その後の意識にもつながるようです。

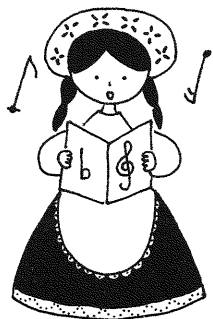
数年前までは、このようなかたちを取らず、新入の子どもたちと担任とでがんばって遊戯室へ行きました。今のような取り組み方になってからの方が、年長児が年中児や年少児へ思いを馳せることや、遊びのなかでの出会いやかかわり合いが自然に見られるようになったように思います。

入園式が始まりの日ですが、もうすでに何日も前から“新しい出会い”に向けて入園の準備は始まっています。お部屋の準備。どういう配置にし

よやかな、本箱の向きは……、積み木はどこに……、ままごとは……、絵本は何がいいかななどと環境を整えながらだんだん気持ちちは新入園児の姿を思い浮かべるようになります。これらの準備にはその園らしさ、大事にしていることがあるのではないのでしょうか。本園らしさは何なのか考えてみました。

ひとつは「なまえ」に関することになるでしょう。入園式を迎えるまでには、一人の子の名前を何回書くでしょうか。名簿作り、靴箱、コート掛け、タオル掛け、引き出し、外靴入れ、着替え入れと、一人ひとりが何か所か自分の場所をもつこととなります。この数は結構多い方でしょう。古い園舎の構造上作りつけの棚がないので、家具を置いて個人の場所を決めることとなります。いろ

いろなところにもものを置くこととなりますが、今の条件のなかで、なんとかわかりやすく……と思いつきながら準備をすすめます。その名札を、本園では年少児から年長児まで全員がシールやマークではなくひらがなのフルネームで書きます。きっと家で書いているのと同じでしょう。本人は読めなくても、大勢いるなかのひとりの人間としての存在の象徴、といったら大げさかもしれませんが、目印ではなく、ひとりの存在をしつかり受け止めていますよ、保障していますよ、あなたの存在の証ですよ、という思いの現れです。特に年少児に





とつてはなんだか読めないわからないものでしょう。でもすぐにわからなくても、場所、位置としてだんだん感覚的に認識していくでしょうし、先生と一緒に「ここがあなたのところよ」と探したり見つけたりすることが教師とのつながり、信頼関係を築いていくことになるのではないのでしょうか。だんだんにわかっていくことは、自分の世界を広げて安定していくことになると思っています。

名前を何回も繰り返し書いていくなかで「この子は大きいのかしら……」「面白い名前……」「願いが伝わる名前なこと……」など、名前から勝手にイメージを膨らませたりしているうちに、だんだん一人ひとりが身近になり、まだ会っていないのを知っているような気がしてきます。きっと家ではおかあさんやおとうさんが、ハンカチ・靴・靴下・靴袋・かばんなどなど、いろいろなものに

名前を書いていることでしょうか。同時進行で幼稚園では私が……。みんなでひとりの子の新生活を支えようとしています。その気持ちは同じかもしれません。違うのは、こちらは一度に大勢と向き合うということでしょうか。

もうひとつ、胸につける「名札」がありません。参観の方に「名札はないのですか？」と、よく聞かれます。本園には子どもにも先生にも名札はありません。では、どうやって名前を覚えていくのでしょうか。私たちは一人ひとりの子どもたちとかわかること、話をしたり触れ合ったりするなかでだんだんに覚えていきます。一緒にくをした○○ちゃん、あるとき泣いていた○○くん、○○が好きな○○ちゃん、○○だった○○ちゃんなどというようにエピソードを通して知

り合いになり、名前・クラスを覚えていきます。その時の手がかりになるのは靴に書いてある名前ですが、その人の“人となり”が名前を伴ってくるという気がします。名前を覚えるには多少時間がかかりますが、名前を知っているというだけでなく、”そういう名前をもつひとりの人”と“わたし”が知り合っていくことだと考えています。もともと子どもたち同士はこのようにして名前と顔を一致させているのではないのでしょうか。大人も同じ感覚で関係作りをしているということでしょう。

保護者の方も、はじめは名札がないことで、「名前がわからないから声を掛けにくいです」という声もありましたが、逆に「お名前はなんていうの？」と話しかけたり「おはよう」と声をかけたり、子ども同士が呼び合っているのに耳を傾け

たりして、かえってかわるうとするようになるようです。

“なまえ”について思い巡らすことで、基本姿勢を考えさせられました。どの園にも何かしらこだわっていることがあるでしょう。そこに、園の考え方、ポリシーがあり、それは保育に反映すると思います。年度始めに、いつもしていることを、自分たちはなぜこうしているのかあらためて考え直すことは保育に対する姿勢を確認するよい機会。新年度を迎えるにあたって、持ち物、遊具、用具の出し方なども見直し再確認してみたいと思います。

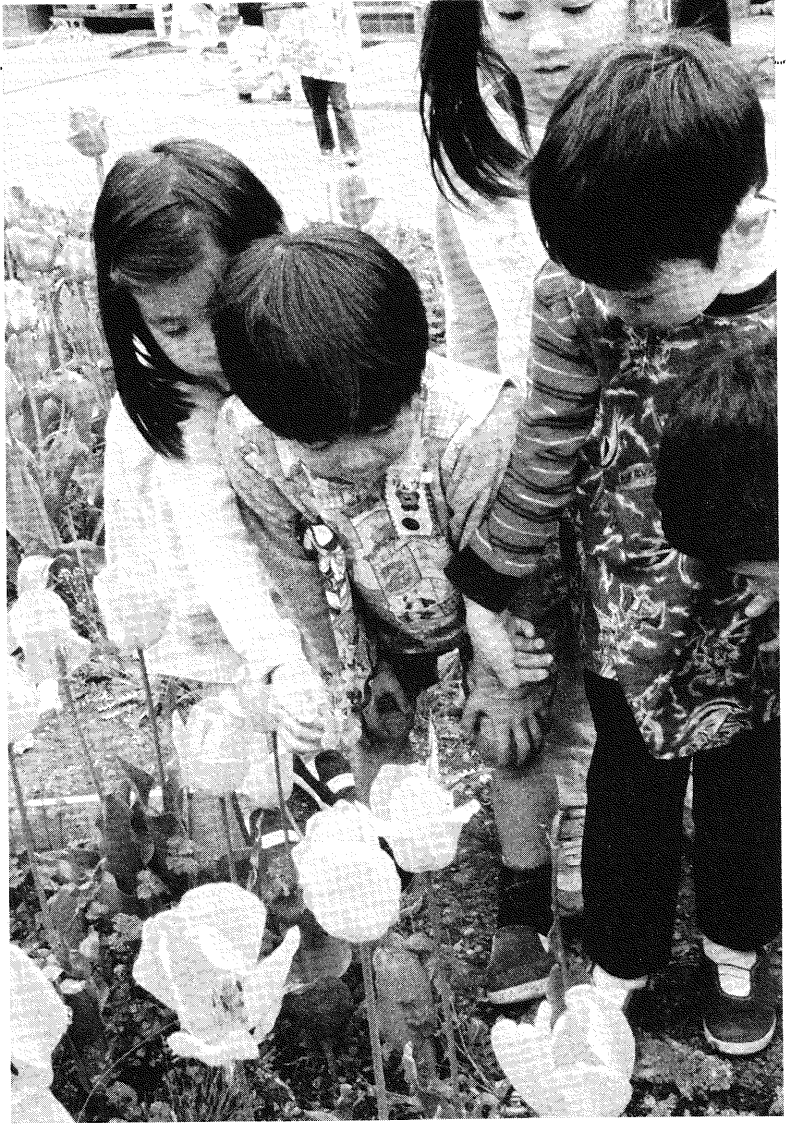
物事の始まり、出会い方の意味深さ、大切さをあらためて考えさせられました。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

ある日

撮影・平野 清





長期化する人生の各ステージの位置づけ

— 生涯発達時代の乳幼児期を考える —

本田 和子

はじめに

人生最初の段階たる乳幼児期に独自の意味が発見され、格段の重要性の認識において社会的に注視されるようになったのは、おおむね十九世紀か

ら二十世紀にかけての出来事であった。それは、第一次産業社会から工業化社会への転換を図り始めた国々において、近代化と総括される社会変革と連動する出来事でもある。結果として、幼い子どもたちは、近代化を成し遂げさらにその推進を

企図する未来社会を担うべく、ふさわしい養育・教育の対象とされ、二十世紀後半には遅まきながら人権の対象ともされた。契約を核とする近代社会で、契約の主体たり得ない未成年者たちに一人前の権利を付与するのは、画期的かつ劇的な価値観の転換といふことができる。この時期に及んで、漸く、社会的に「子ども存在」を不可避とする価値観が、地球上を覆い始めたといふべきであろう。

ところで、近代的孩子も観の確立を見たといわれる二十世紀前半に、人の一生はどの程度の量において措定されていたのだろうか。そして、高齢化が進行し、平均寿命が八十歳を越えようとする今日、飛躍的に長期化した人の一生との対応で、つまり、人生の持ち時間が量的に増大しつつある今日、乳幼児期の位置づけは不動であり続けるのか、否か。六十年の人生の最初の段階として期待

されていた事柄と、八十年の人生のそれとは同一であり得るのか、否か。仮に、乳幼児期の重要性は不変・不動であったとして、その内実にいささかの変化もないと言い得るのだろうか。

「発達途上態」という価値概念の発生

社会的必要者として「子ども」が発見されて以来、彼らの心身の変化は「発達」と呼ばれ、成人に至るまでに「基本的変化の終了」が期待される必修課題として位置づけられた。もちろん、近代化以前の長い長い時間のなかでも、幼い人たちの心身は、人生の最初の時期に質量ともに急速な変化を遂げていたことは自明であろう。そして、成人としての生き方を可能とすべく、それぞれの社会が要求する成人への課題を達成して一人前と認められていったに相違ない。しかし、それら変化に一定の法則を発見して「発達」と命名し、法則

通りに変化していく過程に一定の価値を付与したのは、未成年者の成長過程にある水準を設定し、その水準への到達を目標達成と期待した近代社会の営みであった。

各種「学校」が普遍的な教育装置として位置づけられることで、就学最適期を示す発達状態への到達が目標とされ、また、職業・結婚・政治参加等、社会生活への適応可能状態への到達が目標とされる。伝統的社会の恒常的に安定した状態とは異なり、不断に変化し進歩し続ける社会の生活者たるべく、基本的な知識情報に加えて、新たな事態への対応を可能とする応用力の育成など、社会が学校に要求するものが増加する。それと連動して、個人が学校に適應するために、基本的能力や耐性にも質量ともに変化が生じて、就学期の子どもたちに、相応の能力・耐性が要求されるのは自明であろう。

さらに、「子どもの発見」と連動しつつ社会的要請に應えて「子どもの心身の発達研究」を活性化させた二十世紀は、後半の認知科学の深化に伴い、その解明のために、「人間の認知活動の極く初期の状態」を、科学という無影灯の下に浮かび上がらせることを求めた。発達研究は乳児から胎児までへと、止まるところのない遡及傾向を示しつつ今日に至ったというわけだ。こうして、密度を濃くしつつ人間の初期段階へと遡り続けた発達研究は、なぜか成人段階到達までという上限に関しては、疑問を呈することをしていない。すなわち、未成年者が成人するまでの心身の変化メカニズムの総称とする「発達観」は、覆されることなく二十世紀を経由してきたのであった。

平均寿命の伸長と「生涯発達」

しかし、今世紀に入ると、発達の上限を「成人

まで」とすることに疑義が呈され、問い直しが起こり始めた。伸長し続ける平均寿命に対して、人間の心身変化の解明を「初期段階」だけに限定することの妥当性が問われ始めたのである。増大の一途を辿る高齢者集団に生き甲斐を与え、彼らを社会的人材として活用すべく、「生涯発達」なる概念が提唱され、人の生涯にわたる心身機能の解明が必要とされ出したのである。ただし、「生涯発達」の概念は、彼ら高齢者集団の活用という効率的な目標にのみ奉仕するものではなかった。心身の変化を全生涯にわたってフォローすること、そして、その変化をふさわしく位置づけることは、長い長い一生を与えられた個々人にとっても

意味あることは自明である。なぜなら、生涯にわたる変化を俯瞰し、加齢に伴って変化し続ける自身の心身を肯定すること、そして、それを不可避的な価値として享受することは、それぞれの

生き方とその設計に深く関与するからである。

となれば、「生涯発達」という語と概念の発生が、発達研究の上限を変え、発達という語の内容を変化させるのは当然であろう。何しろ、対象とされる期間が、成人までの二十年前後ではなく、全生涯の八十年とされるのだし、そこに生じる変化が、未成年期のそれのように必ずしも上昇路線を辿るのではないのだから。

時代の価値観と「発達」の位置づけ

「発達」という語で示される八十年分の変化は、資質能力の質量あいまっての「増大」や「上昇」



という単一の把握では捉え難い。それゆえに、新しい分節化に伴うそれぞれの位置づけと異なる意味の確認が要請されよう。つまり、単なる「増大」や「上昇」だけではなく、新しい「発達価値」が明確化されねばならないということだ。

先に触れたように、「子どもの発見」も「乳幼児期の重要性の認識」も、いずれも近代化と連動する出来事であった。近代化が、産業構造の一大変化によってもたらされ、それに伴う社会構造の変化は新たな分節化のもとに人々の生き方の再編成を試みている。小さい人たちが成人とは異なる属性において分節化され、「子どもと大人」という二項構造ができあがったのもその結果である。分節化は「子ども」と「大人」を相対する二項として分類しただけではなく、他の次元でも、「経営者と雇用者」「ホワイトカラーとブルーカラー」「就業男子と専業主婦」など、多岐にわたっている。

る。広い意味での近代的階層の出現であった。

それら二分されて対峙させられた各階層間では、力関係に基づいて上下の序列化が進行し、それぞれに相関的な価値観が形成された。子どもよりは大人が上位に置かれ、雇用者にまして経営者が力を持ち、社会的身分と権力とより豊かな経済力を与えられる。家庭内では、家を守る妻よりも外で収入を得る夫が力を持ち、両者の間には自ずからなる序列が形成されたのもその例である。市民的平等を主張した近代は、支配者たる領主層と被支配者たる農民層という対立構造を否定し崩壊させはしたが、産業構造の転換に伴い、新しい対立する二層を随所に出現させたのであった。

となれば、力という点からは「増大」をめざす営みが、序列という点からは「上昇」を志向する動きが、絶対的な価値として人々の視野に迫り出してこよう。知力・体力・財力等、すべてにわ

たつて力を蓄えていくことが是とされ、職場や学校においても序列を上げることが目標となる。したがって、近代資本主義下の競争は、国益追求や資本家層の富の蓄積のための、国家と国家の間に、あるいは巨大企業相互にのみ、適用されるものではあり得なかった。すなわち、大は国家から小は学校や家庭内にまで、競争原理が浸透し、「増大」と「上昇」は不可避の価値として人々の生活全般を覆ったのであった。

子どもが成人するまでに相応の力を蓄える、すなわち、できなかったことができるようになり、人としてのステージを相応しく上り続けることが、未成年者の肩に負わされた至上の課題となる。たとえば、乳児から幼児へ、幼児から小学生・中学生など学校教育の享受者へと、一段ずつ段階を上がっていくこと、できれば可能な限り速やかにそれを成し遂げること、そしてそのための

資質能力の向上が、段階毎に設定された「発達」の目標とされそれをよりよく達成するための仕方が価値とされる。これらはいずれも、「近代」という時代が招き寄せ人に背負させた必然というべきであらうか。

しかし、飽和した近代主義からの脱皮を願う社会的・心性的な変化とあいまって脱近代が志向される今日、単なる「増大」「上昇」という価値観もその絶対性を失って王座が揺らぎ始めている。そうした土壌のなかで出現したのが平均寿命の伸長であり、「生涯発達」という語と概念であった。「生涯発達」という語と概念によって、とかく「増大」と「上昇」を目標とし価値としてきた「発達観」には、当然のことながら疑義が呈されよう。発達観の問い直しと新しい価値の設定が試みられ始めたのは、脱近代のこうした動きとも連動している。社会が新しい価値を求め始

めたとき、人間の心身の変化に關しても、同様に新たな意味づけが求められ始めたのであった。

各ステージの位置づけと付与される意味

八十年という時間を、仮に大きく三つに区切ってみる。成人への道を歩む「未成年期」と、成熟した心身機能を駆使して生産に従事する「成人期」、そして、その後にく「高齢期」である。

成人に至るまでの二十余年を一つにくくると、あるいは、おおよそ四十余年の成人の時代をいくりにすることなど、分節化に伴う乱暴さはあえて承知の上で、これら三分節に即してそれぞれの位置づけを試みるとすれば、それぞれのステージを彩るものとして、以下の記号を付与することが可能ではないか。

「未成年期」という最初のステージには、「生成」「遭遇」「変化」という記号を、成熟した心身を活用する「成人期」には、「生産」「対話」「選

択」を、そして、最終ステージたる「高齢期」には、「持続」「安定」「共生」という特色を付与することができるのではないか。生成し続ける内的エネルギーに促され、未知の人や物との遭遇を繰り返しながら、不断の変化を常態とする未成年期、成熟した心身を駆使して生産活動に勤しみ、人や物との対話を重ねつつ、自身の意とするところを選択する成人期、選択すべき対象には、職業・結婚・家族の構成等、生き方にかかわるすべてが含まれることは言うまでもない。高齢期の心身エネルギーは、生成や生産に機能するにまして、持続のために活用される。心身機能とエネルギーの持続によって、生の安定が保たれるがそれを支えるのが人や物との共生であろう。高齢期の心身の状態が、「増大」「上昇」等の尺度で測られるならば、それらは「衰退」「減少」など、凋落を示す悲しい記号を纏わされることになる。しかし、「持続」と「安定」とそのための「共生」

は、高齢者になうべきふさわしい価値であり、さらにも、人類存続のために地球的規模で求められている切実な価値目標と言い得よう。

さて、ところで、これら試みに設けてみた九種の価値目標、すなわち、「生成」「遭遇」「変化」、「生産」「対話」「選択」、「持続」「安定」「共生」は、とりあえず、成長過程に即した平均的な段階区分に即し、その段階の平均的な心身機能に合わせて設定されている。しかし、これらは、いずれも、人の一生を通じて追求されてしかるべき価値目標であり、個々人の現状に即応して組み替え可能なものと考えらるべきであろう。たとえば、高年齢に至っても「生産」を旨とし、そのための「対話」を怠らない者、あるいは、早々と「安定」と「共生」を選択し、そのための心身エネルギーの持続にウェイトを置く者など、さまざまな組み合わせが可能なのである。それら組み合わせの賢い選択によって、自身の生の時間を有意義かつ有

効に行使用することができ得るといえよう。

ところで、ここで、私どもは改めて気づかされるのではないか。生の時間の長期化によって「発達」概念の更改を迫られ、それぞれのステージが掛け替えない意味と価値で彩られることになっても、最初の段階、仮にそれを「未成年期」とおおまかにくるとして、そのステージに与えられる意味と価値には、さほど更改が必要ないということに……。とりわけ、「未成年期」を細分化して、その初期段階を一つの分節単位として位置づけるなら、この不変性はより鮮やかに私どもの目を射るであろう。発達観が更改され、それに伴って一生の追求目標が変化する。しかし、それにもかかわらず、乳幼児が立つべき人生の最初のステージが変わらぬ色に彩られるとき、私どもは、この時期の「発達」の不変性と普遍性を改めて確認させられ、心強い思いに捉えられるのではないだろうか。

保育の変革を目指して(1)

―折々に考えたこと―

入江 礼子

「静」の園から「動」の園への第一歩

はじめに

光陰矢のごとし。月日の経つのは本当に早い。私は、最近までP女子大学幼稚部で五年間園長を兼任していた。振り返ると、この五年間、幼稚部のある週日は子どもたちが家路につく二時過ぎまで「命を預かる」重みを感じない日はなかった。また本務である大学での講義をしても、その間に幼稚部か

ら子どもの怪我その他を知らせる伝言が携帯に入っているのではないかと心配でたまらないことも多くあった。朝預かった命を無事に保護者の手元に返すという当たり前のことの重さに押しつぶされそうになったこともある。しかしほとんど圧倒的ともいえるこの「命を預かる」重さを感じ続けた五年間は、不思議なことにはただの一度も職場に向かうことに対して「嫌」と思ったことのない年月でもあった。い

や、「嫌」どころか、一緒に幼稚部の兼任を言い渡されたNさんとコンビを組んで仕事をするということの楽しさと醍醐味を知った日々であり、未成熟な保育実践の場が様々な紆余曲折を経ながら成熟への歩みを始めるときに当事者でいられる幸せと、当事者であるがゆえの責任の重さ、そして様々な選択を迫られる苦しさを心ゆくまで味わえた日々でもあったのである。保育の当事者性とは、その場を作り、もちこたえる責任をもつということであると強く感じた。このスタンスはいわゆる周辺人としての研究者のスタンスとは大きく違っても感じた。

初めての小さな公開保育をめぐる

二〇〇五年度、幼稚部兼任になって五年目に入ったとき、私は担任の先生方に「今年は小さな公開保育とその後に続く保育研修会を十二月に予定したので、それぞれが今の自分としてのテーマをもって臨んでほしい」旨を伝えた。若い担任たちは昨年とメ

ンバーが入れ替わらず、曲がりなりにも少し保育の積み上げの時期に入ったと感じたからである。それぞれのテーマは相談に乗ることにして、そんな宣言を行った。しかし日常の保育の忙しさのなかで自分のテーマを決めるのは容易ではない。ましてやまだ「自分からこのテーマで」という「保育者自らが発的にテーマ設定を行いたい」という段階ではなく、結局は園長である私からの、ある意味では「業務命令」の形であつたので、テーマをもち続けた保育者、途中でテーマが変わった保育者、テーマをもち続けられなかった保育者と、各人各様の様相を呈した。けれども「小さい形ではあつても外部に開く」ということは譲れなかった。そこでテーマを日常の保育から立ち上げたもので、日々の保育と同時並行で、かつ、保育者間で共通理解がしやすい「造形活動」を切り口とした発表をすることに変更した。私が幼稚部の保育が「ここに至るまでの経緯」を、担任たちが「今年度の造形活動から」、またN

さんが「今後の課題」ということで公開保育と拡大園内研修会を行ったのである。外部からは十名程度の方に来ていただくという本当に小さな公開保育と研修会ではあったが、曲がりなりにも外部に開いた活動を行えたことは、それまでの振り返りと今後に向けての方向性がある程度明らかになるという大きな効果をもたらしたと感じている。

未来に向けてのひとつの節目に差しかかったこの時期に、この五年間の折々に出会ったこと、そしてそこから考えたことをもう一度今の時点で整理をしつつ、この五年間の意味を私なりに問い直してみようと思う。

曖昧な保育観

私は幼稚園部の兼任になるまで、恥ずかしいことに自分の保育観というものを意識的にしつかりと客観化して考えたことはなかった。それはそれまでは「根っこの部分と同じ」と感覚的に感じられる人々

の間でしか生活していなかったこともあり、自分の保育観がどんなものであるかを説明したこともなかった。あるのは自分の身体のなかにある感覚だけである。もともと感覚的な私は身体で感じたことを言語化することが「不得手」であり、それまでは「不得手」で許され、済まされていた。しかし幼稚園兼任となったときから、いや、兼任とは名ばかりでほとんど幼稚園部専従のような生活を送るようになった瞬間から、「不得手」では済まされない事態と遭遇し、自分とは違う保育観や人間観をもつ人々と相対するなかで少しずつ自分の保育を語る言語を獲得してきたようにも思う。勿論今でもその言語を獲得し尽くしたとはいえないが、そのプロセスを辿りつつ、先ほど述べたようにこの五年間の意味の問い直しができればと考えている。

「静」の園の存在

幼稚園部は大学の併設校であり、大学の建物の一階

部分にあった。大学は幼稚園教員を養成しており、大学と同じ敷地に幼稚園があるということは本来であれば学生にとっても研究者にとってもよい条件といえる。しかしながら私が大学教員として入った十年前前から幼稚園兼任になるまで、子どもたちが園庭で元気よく遊んでいる姿というのはほとんどなかった。ちょうど二階部分に渡り廊下があり、そこから幼稚園の園庭が全て見渡せるのだが、外遊びをする子どもの姿がなかったので随分と静かな幼稚園だと思っていた。保育室のなかにはテーブルと座布団（防災頭巾兼用）のついた椅子が整然と並べられていた。本来ならば併設園があるのだから、そこで何か一緒にできることはないかと考えるのが当然なのだ、これも「直観」で「難しい」と感じ、自分から幼稚園に積極的に働きかけていくということは教員専任時代にはしてこなかった。たまたま



約三十年前私が初めて担任を務めた幼稚園の娘さんで、当時同僚として一年間ご一緒した方が主任をしているとわかり、五年間で二、三回園を訪ねさせて貰ったことはあった。保育室に案内されたとき、やはり外から感じたのと同じようになかは整然としており、壁には子どもたちが描いた行事の絵が貼られていた。あるとき、同じようなこいのぼりがいっぱい作られていたので聞いてみると「同じものを作らないと保護者がうるさいのよね」という返事。なかなか大変だと思った私は以後幼稚園を自分から積極的に訪ねることはなかった。

「静」の幼稚園に入る①——きっかけ——

しかし運命は面白い。避けたものは必ず何らかの形でまた舞い戻ってくる。そんな思いを強くした幼稚園兼任の内示だった。同様の保育観を共有できるNさんと一緒に兼任ということもあって、やらせていただくことになった。その理由のひとつは学園全

体が改革の時期に入ったということある。大学・短大の移転も含めて、その大きな流れのその一環としての幼稚部の園長交代でもあった。幼稚部は五十年近い歴史があり、そのなかで次の年は三歳児が六人という状況になっていた。幼稚部のハード面である建物の内装改修も含めて、私に課せられたことは園児数の確保であった。すぐにはなくても、その確保の道筋をつけることが経営的には最大の課題であったのである。

「静」の幼稚園に入る②―違和感―

日本の幼稚園の保育内容の歴史は振り子のようだと いわれる。幼稚園が始まって以来約百三十年が経つ現在まで、保育内容は数回に渡って大幅な改訂をみているが、その度にその当時のスタイルが幼稚園の保育内容として残っていったことは周知の事実である。私が着任した当初の一日の流れ(図1)を見

てみよう。

この流れだけを見れば幼稚園として現在でも取り立てて特殊な園とはいえない。むしろ普通の園といっても過言ではない。なのに私は何ともいえない違和感を感じたのである。勿論これも体感のレベルではあった。しかし、今回このことをもう少し深く考えてみる機会をもってわかったことがある。それは一言でいえばこの園が「静」の園であるということだ。つまり園に「動き」がないのだ。直感ではあったが、このことが私の何かにひっかかり、それが違和感として感じられたということになる。

「静」。これは子ども本来の姿とは相反する姿ではないのか。子どもは「動」。これが私の無意識にもっていた子ども観の一部であったとその後気づいた。子ども本来の自然の姿である「動」にあふれた幼稚園にしたい。いっぱい遊んで「あしたも幼稚園に行きたい！」と思う子どもたちを何とか増やした

項目	内容
登園	登園後、制服から体操服に着替える（園にいる間は体操服で過ごす）
朝の体操	全員園庭で行う
朝の集まり	朝の挨拶、出席調べ、整列して歌を歌う、当番活動（ウサギの世話、ゴミだし等）
その日の主活動	クラスごとの一斉活動（絵を描く、折り紙を折る、その他）
合間の自由遊び	小学校の遊び時間と同じ。園の遊具は保育室前のスペースに並べられており、子どもたちがそのスペースより遠くで遊ぶことはほとんどない（園庭の滑り台も保育者が付き添って一斉に行う以外は使ってはいけないことになっている）
お弁当前の片付け	
お弁当	一斉にいただきます、ごちそうさまを行う。決められた自分の席のあるテーブルで食べる
静かな遊び	絵本を読む、絵を描く等。園庭に出てはいけない
片付け・掃除	教師が箒ではいた後、雑巾がけを行う
帰りの会	着替え、絵本読み等
降園	園庭に整列後、保育者がそれぞれ指定の地点まで子どもを送っていく

図1 着任当初（2001年）の1日の保育の流れ

い。すべてはそこから始まった。

「静」の幼稚園に入る③

―歴史のなかでの保育内容の形骸化―

幼稚園は五十年に近い歴史をもっている。高い棚の奥や倉庫の奥を見たとき、そこにはその時代としては立派だったと思われる楽器や教具、遊具の数々があることがわかった。あることはわかったが、それを今すぐ活用するには錆びていたり、傷んでいたりでも使用することはできない。ただ、わかったことは「保育内容に関して熱心に取り組んでいた時期があった」ということである。しかし、今述べたようにそれらのものはすでに「お蔵入り」となり、それに代わる教具や遊具があるわけではなかった。職員室の奥の戸棚からは以前の日誌も出てきたし、保育内容が領域になってからと思われる教育課程も出てきた。前から幼稚園部にいる保育者にこの教

育課程の存在を聞いてみると、主任は存在を知っていたが、それを参照して指導計画を作るということはなかったようだったし、担任保育者に至ってはその存在すら知らなかった。ただ先に述べた一日の流れだけが、いつからか、その形を変えずにおそらく「例年通り」ということで綿々と引き継がれていったのだと考えられた。担任保育者が自分の頭脳を駆使して考えるのは「その日の主活動」の部分のみといても過言ではないという状況が私が着任した二〇〇一年度当初にはあったのである。それ以外の流れはほとんどルーティンとして決まっており、その間い直しもないまま引き継がれていた。「その日の主活動」にしても前からいる保育者に聞くと「前の日に、適当に考えた」ものであったという。それに向けての具体的な活動の計画を書き残しておくことはなかった。幼稚園部の歴史の流れのなかでは指導計画を熱心に立てていた保育者がいたことも日誌から

わかっていたが、指導計画のようなものはもうなくなっていたのである。

「動」の園にむけての第一歩

これだけ「静」が支配する園をなんとか子ども本来の姿と私が信じる「動」の園にするために一歩を踏み出さなくてはならない。そんなことを思つての園長業出発となった。

園環境を見直してみると、「静」の部分はいっぱいあった。まずは図2の保育室のなかは先にも述べたようにテーブルと椅子がきちんと並べられ、その椅子にも個人の座布団が置かれており、子ども個人が座る場所はいつも一定であった。また保育室を出たところはコンクリートのたたきになっており、そのすぐ園庭側には滑り台、ジャングルジム、シーソー、鉄棒といった固定遊具が所狭しと並べられていた。この意味は見方の分けられるところであるが、私には園庭の奥のほうには行かずに保育室の前にあるこれらの遊具を使って遊んでほしいという保育者側のメッセージにも受け取れた。勿

3歳児保育室	4歳児保育室	4歳児保育室	5歳児保育室	預かり保育室
コンクリートのたたき				
滑り台・ジャングルジム・シーソー・鉄棒・花壇				
園庭（保育室の南側）				

図2

論このように受け取れるということが正しいかどうかの検証をすることは難しいが、少なくとも固定遊具を越えて更に向こうにある園庭で遊んでいる子どもの姿をほとんど見かけないことからそのような推測したのである。これをなんとかしなくてはならない。

また保育内容に関することでは一日の流れのところでもわかったように、保育者が目の前にいる子どもも状態を理解しながら柔軟に保育を行う部分が非常に限られている。これは保育内容における「静」の部分と呼んでもよいのではないかと考えた。もうひとつ忘れてはならない「静」の部分は保護者会にあたるものがなかったことである。幼稚部の主催する懇談会やマジックミラーを使用した保育参観はあったが、親が主体的に動く保護者会は立ち上がっていないかった。前園長は「今ほどの幼稚園でも親対応に苦勞している。保護者会があれば、保育のわか

らない親が言いたいことを言ってくる可能性があるので、あえて混乱が起こるような場を作る必要はない」と考えられていた。しかし幼児期の子どもをもつ保護者は親になってまだほんの数年しかたっていないことを考えると、その不安を受け止める場としての幼稚園の役割もあるのではないか。また保護者は私たちが思う以上の力をもっている、それを見すみす埋もれたままにしておくのはあまりにももったいない。子どものために何か力を借りることができないだろうか、そう考えていずれば保護者がすべてのリーダーシップを取れるようになることを願ってふりーじあ会という保護者会を園主導ではあったが立ち上げることにした。

こうして「環境」「保育内容」「保護者」、この三点の「静」から「動」への初めの一步を踏み出すことになったのである。

大いなる足跡

—まさる君とライオン—

高橋 麗子

まさる君はいつもお父さんと学校に来ています。入

て下さいました。

学当初は片時もお父さんと離れず、一日中一緒に過ごしていました。お家でもお父さんが仕事に出かけるときは泣いて引き止めるほどでした。お父さんはそういうまさる君の思いを汲んで、学校ではずっとそばにい

学校生活に慣れ、私たち職員とも仲良くなってくと、少しずつお父さんから離れて過ごす時間が出てきました。それでもふっとお父さんを思い出しては、お父さん！、と大きな声で叫んで姿を確認することが

続きました。やがてその間隔が少しずつ長くなり、遂にはお父さんから完全に離れ、お父さんが迎えに来るまで遊んで過ごすようになりました。そうして気がつくくと学年が変わっていました。私たち職員はそういう学校生活に理解を下さったご両親と、それまでお父さんがずっと一緒にいて下さったことに今も心から感謝しています。

まさる君がお父さんから離れて過ごすようになる過程で、ライオンがいろいろな形でまさる君の身近にありました。私はライオンがまさる君にとって極めて特別な存在であると思いました。

ライオンキング

まさる君はビデオを観ることが好きで、学校に来ると必ずポンキッキ・電車・ウルトラマン・ディズニー映画などを、自分で早送りしたり巻き戻したりして観ていました。中でもライオンキングは大好きで繰り返し返

し観ていましたが、お父さんと離れて過ごすようになった頃はお父さんと別れる直前に観ることが多くなりました。「お迎えくる」とお父さんに何度も何度も確認したり、手をつないだり、背中をかいてもらったりして、身体に触れてもらいながら観ていました。まさる君がどのくらいビデオを観るかは日によって違い、それはお父さんと別れるための気持ちの準備にかかる時間の違いのように思われました。長いときは何かしら離れ難い思いがあるのだらうと思いがせずまさる君の気持ちが出すのを待ちました。やがて「ふうせんする」と言って裏庭に行くことがお父さんに行つていいよという合図になり、まさる君の方からお父さんと離れるようになりました。



まさる君はお父さんがすぐに出かけずにいると、「行ってくるよ」(お父さんが仕事に出かけるときの言葉)と言って早く出るように催促していました。そのときの真剣な表情から、お父さんから離れるときにまさる君が並々ならない決断をしていることがわかりました。そしてお父さんが出かけると、まさる君は駐車場にある自分の車を窓から見たり、お迎えがくると私に繰り返し確認したり、「お父さん」と呼びながら校内を回ったりしました。そうしてお父さんがいないことを確かめても気持ちが崩れず、反対に確認することで気持ちが落ち着いていくような印象がありました。私にはまさる君が、お父さんがいなくても自分の力でがんばってみようとしているように思えました。

こうした生活が続いたある日、まさる君はライオンキングを観た後、ドライバーを使ってビデオを分解しテープをトイレに流しました。まさる君のライオンキ

ングはこの時一旦終了しました。私は、ライオンキングが好きで毎日のように楽しんでいたまさる君が、お父さんから離れて過ごし始めたこの時期にビデオを分解したことにまさる君の自立の歩みの始まりを感じました。

ライオンちゃん

ビデオをトイレに流して二、三か月後、まさる君はホールの棚にあったライオンのぬいぐるみを手にししました。それまでもぬいぐるみを手にすることはありませんでしたが、この日は様子が違い一日に何度も手にしていました。この日からまさる君とライオンはいつも一緒にいるようになりました。まさる君は自分で「ライオンちゃん」と名前をつけ、学校に来るとまず手に取り、何をするにも一緒で、帰るときにはきちんと自分のロッカーに戻すという生活になりました。

水ふうせんをするときには濡れないように上手に脇

の下に挟んでいたりと、隣の幼稚園に遊びに行くときにも、近くに買い物に行くときにも必ず連れていきました。幼稚園の園庭では遊具の上に乗せて離れた所から眺めたり、ライオンちゃんが転がって落ちたときには

自分も脇に転がったりしました。一度はわざわざ二階のベランダまで行って下に落とし、上からじっと見た後ゆっくりと拾いに行つたことがあります。拾いあげたときは丁寧にライオンちゃんの砂を払い、大事そうに抱いていました。また、園庭にある大きなトンネルには以前から興味があり、時々中を覗いていたのですが、狭くて薄暗いせいかなか入ることができずにいたのが、ライオンちゃんを連れていくようになって数日後に挑戦しました。私もついていこうと近くまで行きましたが、押し戻されてしまいました。そして、まさる君とライオンちゃんだけで入っていき、別の口から出てきました。その直後ライオンちゃんだけを投げ入れ、追うようにしてまさる君も入り、ライオ

ンちゃんを拾って出てきました。出てくると地面に転がし、まさる君も脇に転がってしばらく過ごしていました。初めての探検の成功を一緒にかみしめているようでした。

やがて朝来てもすぐにライオンちゃんを手にしない日があつたり、校外に出るときに連れていかなくつたり、途中で私に学校まで取りに戻らせたり、連れていったライオンちゃんを私に学校に戻しに行くように言つたりするようになりました。だんだんライオンちゃんと離れている時間が延びていきました。ある日、水ふうせんをしているときにライオンちゃんに水がかかりました。まさる君は手で拭きとっていました。がひどく濡れてしまいました。すると、まさる君は水ふうせんの水をライオンちゃんの頭や顔にかけてビシビシにしました。それからタオルで丁寧に拭き、自分のロッカーに寝かせてその後はライオンちゃんから離れて過ごしました。帰り際に再びライオン

ちゃんを取りホールへ行つたまざる君は、初めてライオンちゃんを手にした棚に向つてポーンと投げ、ちゃんと棚に乗つたことを確かめて帰りました。いつもと違う一日の終わり方に私はまさる君の気持ちの大きな動きを感じ、ライオンちゃんは必要なくなるのかもしれないと思いました。

変身

三週間という短い期間の中でまさる君とライオンちゃんの間はまたたく間に変化し、まるで洗い流すかのように水をかけてビシヨ濡れにしてからは、だんだん手にすることが減りました。そしてライオンちゃんを手にしてちょうど一か月がたった日の朝、まさる君はライオンちゃんの鬚を引っ張つて抜きました。その後教室に置いたままにして遊んでいましたが、午後になってライオンちゃんの耳を引っ張り「とるの」と言いました。ハサミを出すとまさる君は自分

で切ろうとがんばりました。結局うまくいかず、私に切るように頼みました。言われたように両耳を取ると、続いてたてがみを刈ることになりました。そして最後にしつぽの先についていた毛も刈りました。とうとうライオンちゃんは動物というより、何だか人間に近い姿になりました（写真）。すっかりやり終えたまさる君はライオンちゃんをじーつと見つめた後、私に持たせたまま一人で教室を出ていきました。私はライ



▲変身したライオンちゃん

オンちゃんをどうしたらいいのか迷いましたが、ひとまずまさる君のロッカーに入れておきました。この日、まさる君はとても満足した表情で帰っていきました。

次の日まさる君は一回もライオンちゃんを手にしませんでした。その後もあまり手にしなくなりました。が、改造して一か月程した頃、久しぶりにライオンちゃんを取り、他にウルトラマンの人形とロボットと一緒に持ってビデオを観ました。そしてビデオを離れるときには何も持たず、三体をそこに置いたままにしました。そんな日が数日ありましたが、以後ライオンちゃんはまさる君の生活に全く登場しなくなりました。

ライオンキング再び

ライオンちゃんから離れ、まさる君の生活の中にライオンが一年近く登場しなくなったある朝、偶然にも

ライオンキングのビデオを見つけました。他の子どもが観ているそばへ何気なく近づいたときでした。以前ライオンキングのビデオを分解してから一年半以上たっていました。

久しぶりに観たまさる君は、ヌーの大群に襲われた子ライオンを父ライオンが助け出し、ついには死んでしまう場面を普通の速さで三回観ました。以前は全編を早送りで流していましたが、この日はその場面だけをじっくりと観ていました。そして朝だけでなく、帰る前にもう一度観てから下校しました。それから数日は朝必ずライオンキングを全編早送りで流しました。

再びライオンキングを観るようになってちょうど二週間目、その日も初めは早送りで流していましたが、父が命をかけて助けた子ライオンが成長して大人になり一人立ちする場面になると普通の速さになりました。そしてその先はまた早送りしました。全編が終わったときまさる君は再びビデオを分解しました。一緒にいた

私は激しい衝撃を受けました。それは、これまでのまさる君とライオンにまつわる数々の出来事のすべてが一つのつながりとなってまさる君の中で生き続けていたことに気づいたからでした。そして、ライオンという対象がまさる君の育ちに大きな働きをしていたこと、ライオンを選んだまさる君の直感のすごさに思い到ったからでした。

初めの頃私は、まさる君にとってライオンはお父さんの代わりに彼を支え、守ってくれるもののように思っていました。ライオンとお父さんが重なっているようなそんなイメージをもっていました。しかし、まさる君はそれだけにとどまらないもつとたくさんの役割をライオンに見出し出していたように思います。まさる君はライオンちゃんといふことで勇気を出して新しいことに挑戦したり、苦手なことに取り組んだりすることができました。自分の中に隠れている力を引き出

すことができたのもその一つだと思います。ライオンはいつも同じ役割ではなく必要に応じてその時ときでいろいろな役割をもっていたのだと思います。

まさる君と一緒にいることで、学校生活の中で子どもが選びとったものが、その子どもの気持ちと強くつながり、結果的にその子どもの自立と深くかかわっていることを目のあたりにしました。それはその瞬間その瞬間にはわからないことですが、時間の流れの中で見つめると捉えることができるということをお伝えしました。これをしていて何になるのか、どこにつながっていくのかわからないでいる日々の山のような積み重ねのすべてが育つことそのものであり、だからこそ一日一日が大切だということ。そういう思いで子どもたちと過ごすことの大切さをまさる君は教えてくれたのだと思います。

(愛育養護学校)

私が通った幼稚園・保育園 (11)

思い出の私と記憶の中のわたし

富士原 紀絵

幼稚園の思い出、と言われて自分で正確に想起できる記憶というのはほんの僅かしかない。にもかかわらず、幼稚園時代の自分の様子、自分の巻き起こしたハプニングは数多く知っている。それというのも、成長してから、自分の親のみならず、幼稚園の担任だった先生や友人、友人の親に「幼稚園の時のあなたはこういう子ども

だった」、あの時起こした事件は大変だった」という話を数多く聞かされてきたからである。

私の出身地は宮城県登米郡迫町佐沼という岩手との県境近くの半農半商の片田舎で、人の移動もほとんどなく、幼稚園から高等学校の間、ほとんどメンバーが変わらない（つまり、通うことのできる学校がそこしかない

い」という、現在住んでいる東京からみれば想像もつかない狭いコミュニティの中で育った。狭いコミュニティゆえ、成長してからも幼稚園の担任の先生とのつながりが途切れることはなかった。

例えば、小学校六年生の時、町内六小学校の合同陸上競技大会の校内出場選手に選ばれ、放課後、校庭で練習をしていた際、偶然通りかかった幼稚園時代の担任の先生が、私の姿を見、ことの経緯を聞き、「同級生の中では一番ちびっこでいっつも泣いてばかりいた、あのきえちゃんがねえ、本当に泣かない日は一日もなかったのよ……」と泣いて涙ぐんでいた姿は今でも忘れられない。これは、幼稚園時代の私は全く運動に向く体格でもなく、厳しいトレーニングに耐えうる根性もない子どもだったことを意味しているのだろう。先生が思わず涙ぐむほど頼りない子どもだったということである。

こうした情報を成長してから度々インプットされることで、自分の経験した幼稚園時代の出来事や自分の園児

像が作られてしまっている。あまりにも多すぎて、自分が本当に覚えていることが何であるのか正直よくわからない。あたかも自分自身が記憶したもののようすり替わってしまったものの方が多いのかもしれない。

しかし、そうして作られたであろう幼稚園時代の私の思い出は、それだけ町の多くの人に見守られて育ったということでもあり、今ではたくさんの思い出があることに感謝している。

記憶している二つの事件

その一：お弁当購入事件

園児時代の私を知る人によつて教えられた「思い出」の方が恐らく多い中で、確実に自分の印象に残っている記憶が二つある。一つは「お弁当購入事件」（園児の私にとっては大事件だった）、もう一つは「お雛様折り紙事件」である。自分の母親に覚えているか聞くと、両方とも何らかの形で関与していたにもかかわらず、私に

とつてのこの「大事件」を覚えていないそうである。

お弁当購入事件は、現在の私の金銭感覚を養う上で、きつと大きな役割を果たしたに違いない事件である。私の通っていた幼稚園ではお弁当持参が原則であったが、年長になると親からお金を預かり、パンを購入してお弁当代わりにすることができた。朝、先生が注文を聞き、集金するというシステムだった。私が初めてパン購入を行うことになった日のことである。お金を自分でもつ、という経験がそれまで全くなかったため、どきどきわくわくして先生の前に列を作って並んでいた。ところが、自分の番が近づき、お金を入れた袋（だったかどうかは定かでない）の中を確認すると、十円足りない。慌てて通園バックの中をどんなに奥まで、ひっくりかえして探してみてもでてこない。あまりのショック（この時のショックは、このままではパンを購入できずお昼を食べることができないというショックだったのか、お金が無いという事態そのものに対するショックだったのかは覚

えていない）にぐずり泣き出してしまった。その時、である。大の仲良しのトモコちゃんが私のところにきて、事情を聞き出し（恐らく聞き出すのも大変だっただろう）「十円あるからあげる」と言ってくれたのである。

お金をもらう、ということに何の罪悪感もなく、その好意を一点の疑いもなく受けとった私は、よろこんでその十円を片手にぎっちり握りしめ、少し遅れて先生のところに注文に駆け寄った。まずは袋の中からお金を出した。その後、手の中から十円を出した。すると、先生が「なんで十円はこっちの手から出したの？」と聞いてきたのである。私は「十円なかったからトモコちゃんにもらった」と言った。すると、先生の表情が一変した。トモコちゃんも呼び出し、私たちから事情を聞いた後、先ず私がものすごく怒られた。「お金が足りなかったんだったら、なんで先生に言わないの?」。次にトモコちゃんが怒られた。「勝手に人にお金をあげてはだめでしょう?」。その後、他の組の先生方も集まり、しばら

くの間、私とトモコちゃんの目の前で、話し合いを始めたのである。私はその状況がなんだかとても怖くて、その日の昼は結局購入できたパンも全く手を付けることなく、帰る時までずっと泣きじゃくっていたことを覚えている。

この時の経験がかなり根深いものだったので、小学校高学年になると、百円、二百円程度の貸し借りは、友人間で当たり前になされていたが、私はどんな微々たる金額であっても、決して友だちからお金を借りる（どこかの時点で「もらう」が「借りる」にすり替わっている）ことはなかった。現在もそうで、金額の多少にかかわらず、たとえ十円でもお金を借りるという行為に非常に恐怖感があり、抵抗感があるのはこの時の経



験がもとにあるのではないかと思っている。これが有り難い経験だったかどうかはわからないが……。

その二：お雛様折り紙事件

もう一つの「お雛様折り紙事件」は、やはり年長の時の出来事である。園を挙げての雛祭りに向けて、一人ずつ画用紙にお内裏様とお雛様を折り紙で折って貼り付け、並べて掲示する、という作業に取りかかった。全員、お内裏様は青の折り紙で、お雛様は赤の折り紙で折るように言われ、折り紙が渡された。その時、私一人だけが、お内裏様はなぜ青の折り紙でなければならぬのかと猛然と抵抗した。なぜか。今で言う「ジェンダー」に対する無意識の抵抗といった高尚な感覚であるはずはない。お雛様を赤い折り紙で折ることに抵抗しなかったのであるから。とにかく、お内裏様が青というのが許せなかった。先生は「みんなと一緒」ということを強調したが、私は絶対嫌だといえなくなり、それでも、無理に

手渡された折り紙を折り始めたが、涙と鼻水でぐしょぐしょになり、何枚も何枚も折りなおしているうちに、教室から青の折り紙が無くなってしまった。それで、結局、私の希望する紫色の折り紙でお内裏様を折ることができたのである。私がなぜ紫色のお内裏様にそれほどまでにこだわったのか。それは自分の家にあるお雛様がその理由であったのだと思う。自宅のお内裏様は、紫色の衣装を付けていたのである。きっと、私は「私のお内裏様」を再現したかったのだと思う。

私は「私のお雛様」を作成できたことに大満足し、雛祭り当日も、赤と青で整然と並んで掲げられた折り紙お雛様の中に、たった一つの紫色のお内裏様を発見し、意気揚々と母親の手を引いて、見せに行つたのだ。すると、先に見に来ていた親たちが、私の母親を見、「きえちゃんのだけ、みんなと違うのよ」と指さして話題にしていた。先生は私の母親に謝っていた。私は先生がなぜ母親に謝っているのか、その理由が全くわからなかつ

た。しかも、母親の方も頭を下げており、お互いに謝っているその様子がとても不思議で仕方なかった。母親からは「私らしいけれども、これからはみんなと一緒にしなければだめよ」といったニュアンスのことを言われた。一応できはほめてもらえたものの、他の母親達に笑われた上に、母親も一緒になって笑っていたが、その笑いがとても寂しそだった。その寂し笑いの表情をとっても鮮明に覚えている。そこで私は「なんでもみんなと一緒にであらねばならない」ということを学んでしまった。

現在の都会でならば、むしろ個性的であることが尊ばれるであろうが、今から三十年前、東北の閉じた田舎で生きていく上では、むしろ没個性的であらねば生き難かった。できるだけ周囲から浮いた存在にならないことが重要だったのである。強烈な自己表現をする子はいたが、「変わり者」として幼稚園でも、小学校に入学してからも仲間はずれにされていた。私の場合、恐らくこの時の経験が、人に笑われたいためには、周囲と完全に同

調しなければならぬという感覚を初めて自覚したのだったと思う。その後も没個性的に小学校・中学校・高校時代を無難に過ごしてきた私が、「自己表現」、「自己主張」という行為を是として受け入れるまでにはとてつもなく長い時間がかかったのである。

それでも楽しい幼稚園の思い出

幼稚園時代のたった二つの鮮明な記憶が辛いもので、担任の先生や友人の親の言うとおり、私が泣かない日が一日もなかったのが事実だったとすると、まるで暗黒の幼稚園時代だったように思われるかもしれない。

しかし、母親曰く、私は幼稚園に行くのが嫌だと一度も言ったことはなかったそうである。成長してから通園路を通った時に、その路沿いに住むおばさんにも、私は幼稚園に行く道でも、帰り道でも、いつも大声で流行の歌謡曲を歌っていてそれは上機嫌だったと聞かされた。友人からも、私はやりたい放題だったよな（なんでも、

しょっちゅう小物を壊していたそうである）と聞かされる。やりたい放題だったために怒られたり、我慢しなければならぬ時に堪えられなかったりで、泣いてばかりいたのだろう。私の記憶にはないが、周囲の人から見た私は、どうやらとても充実した楽しい幼稚園時代を過ごしていたらしい。自分の記憶に残った出来事は、恐らく現在の私の行為や行動にも少なからぬ影響があるのは確かそうだな、と思っている（思いこんでいるだけかもしれないが）。でも、周囲の人の思い出の中の私も、きっと覚えている人からみれば、現在の私と繋がっているのだろう。記憶の中のわたしも、思い出の私も、そのいずれもが今の私の基礎となっているに違いない。そしてなによりも、卒園してしばらくたってからも、私の幼稚園時代の思い出を有してくれる人がいることに、つくづく感謝したいと思う。

（お茶の水女子大学）

編 集 後 記

「四月始まり」という生活の切り替えと全く無縁でライフサイクルを過ごす人は、日本の人口の何パーセントぐらいなのだろう。日本社会に生きるということは、学校や職業との関連で「四月」をある特別の意味あいで感じる人になるように（文化的に）教育されるといふ面をもつ。学校・職業という社会制度に直接組み込まれない人も、四月になると世の中が新年度という「正月」を迎えていることに、それぞれの立場から感じないわけにはいかないだろう。そこに桜が「花を添える」構造だ。四月は日本社会に息づくバイオリズムの結節点には違いない。

特集で「入園」について保育者の方々に語っていただいた。子どもが新しい環境に馴染むように、先生方のほうも初心にかえって、その社会性の実践を切り替えているように見受けられる。鯨岡先生の言をかりれば、部外者を「共にある」「共におられる」身近な他者としていくプロセスともいえる。子どもだけでなく教師のほうも四月は人間関係の再編に迫られ、園児をはじめ保護者あるいは新しい同僚に受け入れられ、主体的に受け入れることもできるよう配慮することが主眼となる。そうして「去年の四月」や「十年前の四月」などと引き比べては、自らの社会性の成長を振り返るのかもしれない。
* 本誌へのご感想や投稿希望などは yujimail@yahoo.co.jp までお願いいたします。
(浜口)

幼 児 の 教 育

第一〇五巻 第四号

(二〇〇六年四月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十八年四月一日

編集兼発行人 浜口順子

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8600 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五-1-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一-四一九

☎〇三-五三九五-六六一三(営業)

☎〇三-五三九五-六六〇四(編集)

振替 〇〇-一九〇-1-196400

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中!

子どもはどのようにして

へじぶんを発見するのか

子どものこころと時間と空間と

岩田純一 著

子どもは、こんなにもいきいきと
「あした」を思い描いて、
自己を育てていく…



19×13cm 231頁
定価1,680円(税込)

子どもたちは、「きのう」より「きょう」を懸命に生き、これからやってくる「あした」を思い、未来に向かって生活しています。では、子どもは生まれて成長していくなかで、「きのう」の〈じぶん〉は「きょう」の〈じぶん〉と同じであり、「あした」も同じ〈じぶん〉が続いていくという認識を、いつ、どのようにして獲得していくのでしょうか。豊富な保育のエピソードをとりあげて、子どもたちの育つみちすじを考えていきます。

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

平成17年5月、
保育所のための第三者評価ガイドラインが、
新たに生まれ変わって国から示されました。
本書では、この新・ガイドラインを、
詳細に解説していきます。



小笠原文孝・小出正治 共著

保育所の 読み解く 新・第三者評価を ガイド

— 自己を点検し、評価を受ける

A4判/324頁

定価：2,940円(税込)

【目次から】

PART1 保育所の第三者評価総論

- 1・第三者評価とは？
その本質と意義・目的
- 2・さまざまな評価の視点
～「何を」「どこまで」評価するか～

PART2 評価基準ガイドライン解説

- 評価項目Ⅰ 福祉サービスの
基本方針と組織
- 評価項目Ⅱ 組織の運営管理
- 評価項目Ⅲ 適切な福祉サービスの実施
- 評価項目A

PART3 資料

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。